

第一部会

エサルハドンの「宗教改革」

渡辺 和子

宗教(史)学研究における古代宗教は、進化論的、類型論的あるいはその他のやり方で扱われるにしろ、どの具体例によって構想されるかが問題である。紀元前三〇〇〇年頃から紀元前五〇〇年頃のティグリス・ユーフラテス河流域周辺に形成された楔形文字文化圏の宗教と考えられるメソポタミア宗教は、長期間、広範囲に及ぶため、まだ十分に考察の対象とされていない。東洋と西洋の中間で長期にわたって展開した宗教的状況が、その後の諸宗教に与え得た影響は小さくないはずであるが、たとえばロバート・N・ベラーの近著『人間の進化における宗教』(二〇一一年)においても周辺のしにしか扱われていない。

メソポタミア南部では紀元前三千年紀後半以降、シュメール人の都市国家群がそれぞれの主神を中心とする祭儀体系を形成した。メソポタミア中部にはセム系のアッカド人の都市国家もあり、中南部の都市国家が覇を競いながら統合されて領域国家が形成されていく過程で、諸都市の神々が序列化されていた。紀元前二千年紀前半には、都市ニップルの神であったエンリルが最高神の地位を得ていたが、紀元前二千年紀後半から紀元前一千年紀の前半には都市バビロンの主神マルドゥクが優勢になり、エンリルに代わった。

それに対してメソポタミア北部の宗教的状況はかなり異なっ

ていた。ティグリス河岸のアッシウルと呼ばれた場所が神格化されて神アッシウルが生じたが、紀元前二〇〇〇年頃に都市国家アッシウルが成立し、その後のアッシリア(「アッシウルの国」)の発展とともに強大になり一四〇〇年間にわたって国家神、最高神であり続けた。W・G・ランバート(一九二六—二〇一一年)は「神アッシウル」(*Iraq* 45, 1983)によってこの問題に「学的議論の基礎」を提示した。彼はその中で、先史時代に「場所の精霊 *nunen loci*」であったアッシウルが人格神かつ国家神として発展してゆく段階を、第一に紀元前二千年紀初頭の普通名詞の「神 *ilum*」を神アッシウルの意味で使用する現象、第二に紀元前二千年紀を通して見られる神アッシウルをエンリルと同定する試み、第三にアッシリア王センナケリブ(在位前七〇四—六八一年)が南部のバビロニアを下してマルドゥクをアッシウルで置き換えた神話を作り、バビロニア風の儀礼を実践した段階に見る。これらの三段階については新資料を加えた再検討を要するが、ここでは特に第三段階の後の発展に注目したい。

センナケリブを継いだエサルハドンは、アッシリア王位継承者をアッシウルバニパルと定め、それを遵守することを紀元前六七二年に国内外の要人多数を集めて誓わせた。その時に発行された大量の誓約文書は誓いを立てた各人が持ち帰り、自分たちの神のように敬うべきことが誓約文書中に記されていた。これまで知られていた誓約文書はメディア地方の施政者たちに発行されたものであり、しかもアッシリア本国のカルフ(ニムルド)で発見されたため、大量の誓約文書がそれぞれの地に持ち

帰られたことに疑問も出されていた。しかし二〇〇九年にトルコ南東部のテル・タイナト(古代名はクラニア、クナリアなど)の神殿至聖所で、その地の施政者に発行された誓約文書が発見された(J. Lainger, *Journal of Cuneiform Studies* 64, 2012) ことによって、ユダ王マナセも含めてそれぞれが指示通りに自らの神殿に祀った蓋然性が高まったといえる。発表者は、アッシリア宗教は実質的には独特の一宗教であったと考えるが、最大版図の実現に伴う新たな政治的・宗教的方策として、ローカルな神アッシルの更なるグローバル化を進め、神アッシルの印章が押された法的誓約文書をそれぞれ自分たちの神のように崇拜させた。エサルハドンの「宗教改革」の一環として行われたこのようなことが、神の契約文書を神聖視する宗教運動、具体的にはユダ王ヨシヤの申命記改革に何らかの影響を与えたことも想定できる。

シェリングとレッシングにおける自然的宗教について

諸岡道比古

本論は「ドイツ観念論の父」とされるレッシングと「ドイツ観念論の完成者」と見られるシェリングとにおける自然的宗教思想について比較検討するものである。

シェリングによれば、従来「啓示に基づく宗教に自然的宗教が対比され」、宗教一般はいわゆる自然的宗教である合理的な理性宗教と啓示に基づく宗教とに分類され、しかも啓示に基づく宗教も合理化され理性宗教化すべきとされていた。この考えに異を唱えた人物がレッシングである。レッシングの宗教観は

『賢者ナータン』や『人類の教育』や『啓示に基づく宗教の成立』等において示されている。それらによれば、「人間には自然的宗教に関わる能力がある」が、その能力は人によって異なり、自然的宗教はあらゆる人間のもとで等しい作用を与えることができなかった。そのため、歴史の必然により、啓示に基づくユダヤ教やキリスト教などの積極的宗教が自然的宗教から作り出された。それは、啓示により「より早くより容易に」理性真理に達することができたためである。レッシングによれば、今や『旧約』『新約』も必要とすることなく、理性真理を十分把握するほどに人間理性は発達し、自然的宗教を実現すべき時代になっている。このように、彼は人間にはまず自然的宗教があるが、積極的宗教を介して、自然的宗教を実現すべきと述べる。

自然的宗教と積極的宗教双方にその役割を認めるレッシングに対して、シェリングは積極的宗教を重視する点において同じであるが、異なった宗教分類を提示する。シェリングは理性も感情も宗教原理ではないとし、「人間のなかにある自己の本性によって神を定立する原理」を宗教固有の原理とする。この原理は思惟や知以前に人間を神と根源的に結びつけるものであり、人間本性に基づき生み出されるこの宗教こそ、「自然的―自然に生み出される―宗教、神話を説明する」ものである。神との根源的関係が「最初の人間」によって破棄されたとき、この原理は関係修復のため自然的過程を人間の意識のなかに生じさせる。これが神話であり、自然的宗教である。したがって、自然的宗教という概念は神話に返還されるべきである。この自